



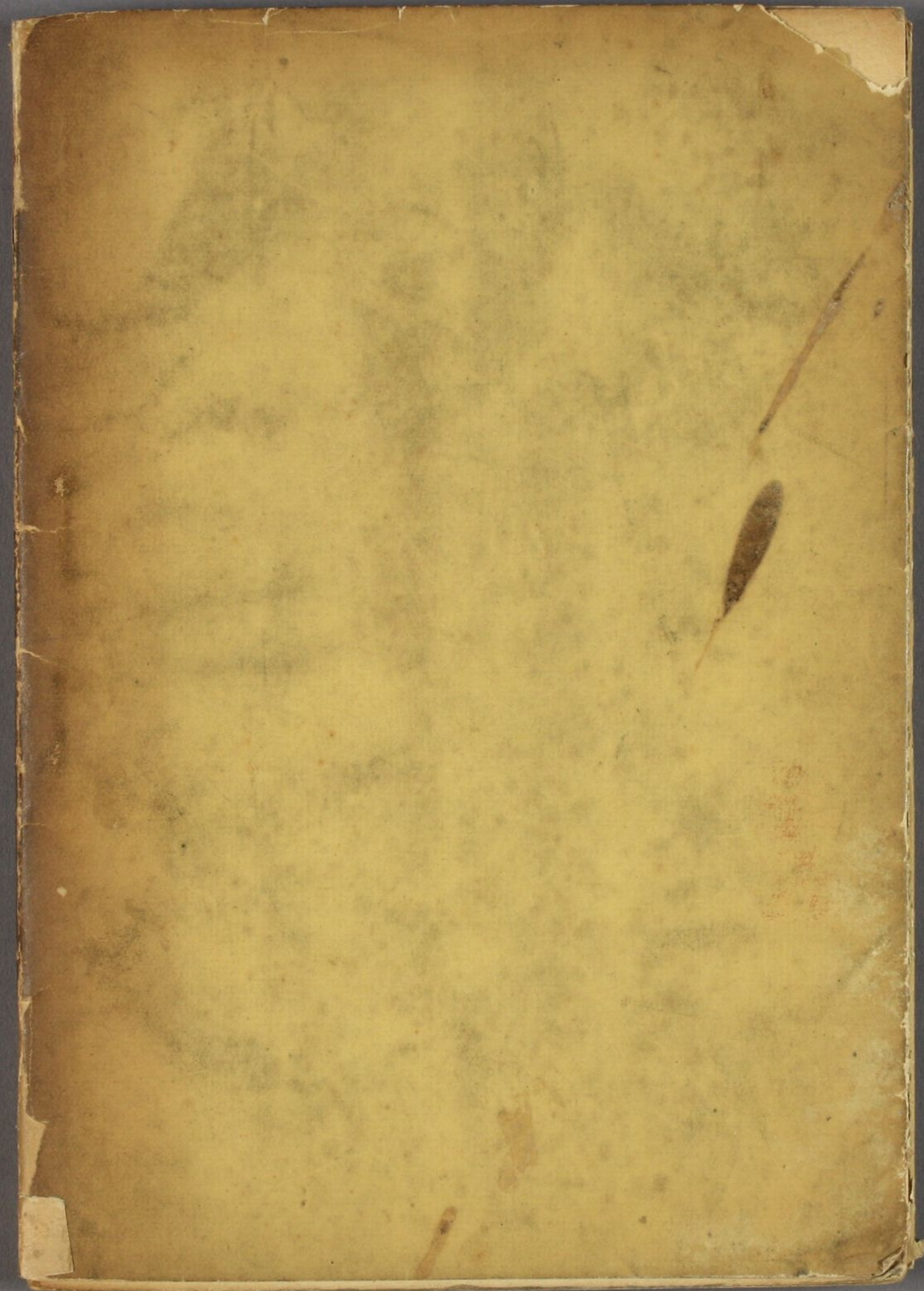
高評御乞

南方の花

7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5 6 7

南方の花

近藤元





高御

南方の花

南方の花

高御元



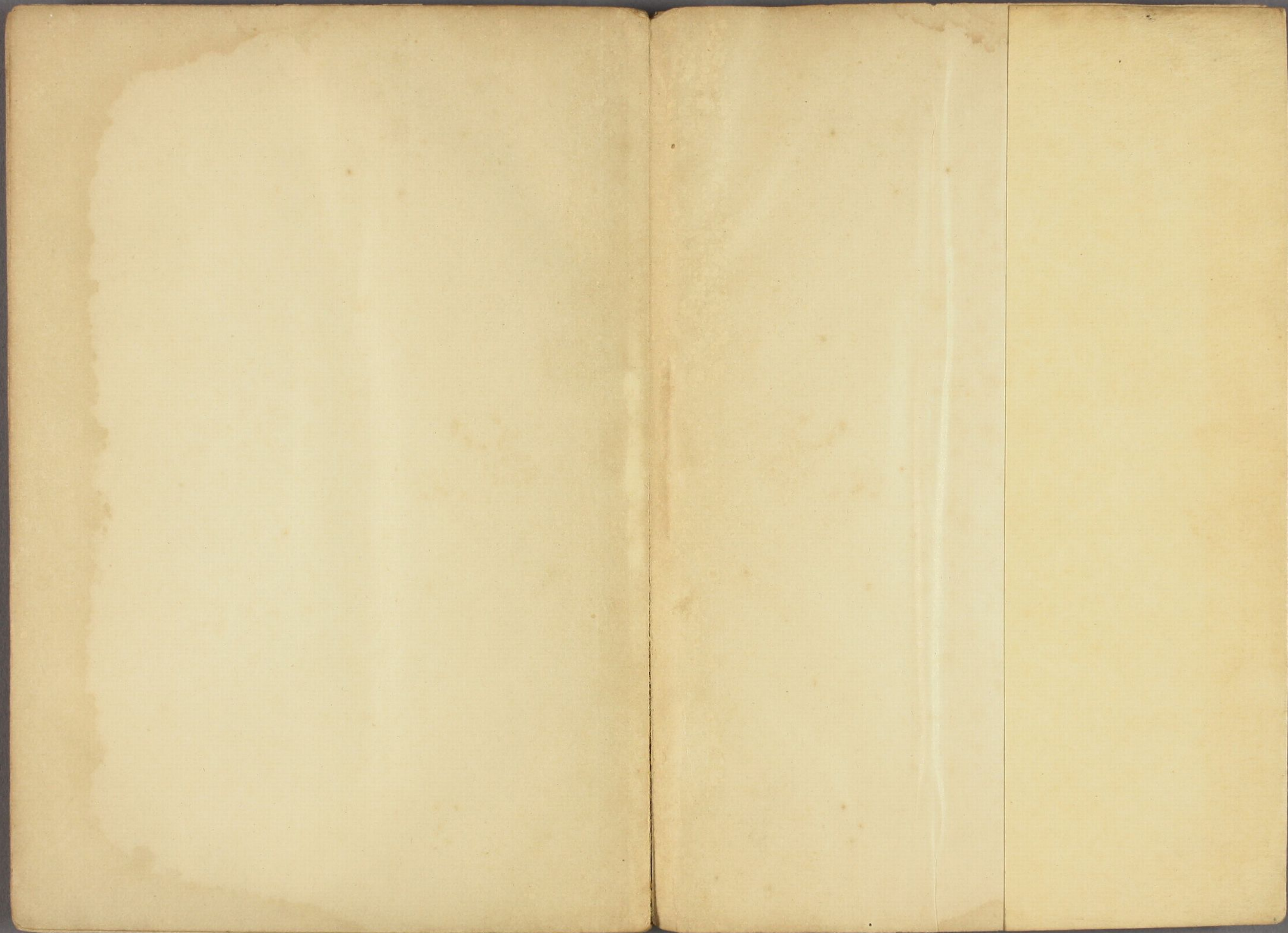
花の方南

元 藤 近

南方の花

近藤元

京 東  
兌發堂光文





南方の花

近藤元

南方の花

近藤元

序

友の歌集「南方の花」が出版せられるに就て、いふばかりなき喜びと感慨とが、自分の胸を流れる。近藤君の歌を讀む饑に取つては、暗い處から、明るい日光の降りそそぐ赤い花を見てゐるやうな感じがする、暗い處から明るい光をみる心持。この心持を自分になつかしみいつくしむと同時に近藤君の歌をなつかしみ愛する。天分豊かなる友の歌集「南方の花」をして、歌壇の矧爛なる句たかき花たらしめよ。而して永久に凋落せしむることなからしめよ。

四十四年十二月五日朝

郊外にて

前田夕暮

繪	葦の葉のそよぎ	夏の呼吸	夢見る花	南の海岸より	序
正宗得三郎	133	103	41	1	前田夕暮

南の海岸より

濕りたる沙鐵（さてつ）に朝の雲にはふ渚（さしづ）に立ちて海を  
さびしむ

柏木（かしき）煮（に）て網染（あみぞめ）むるにはひ海の上の雲にはのか  
に夏の残れる

接吻（くちづけ）けし抱（かか）きし女の顔あまた暴風雨（かぜあめ）の後の海  
に漂ふ

さいかちの花の實となるさびしさにほのかに  
夏もふけてゆくかな

夏ふかし蟬を捕る子の夕陽に黄ばめる顔の涙  
すゝるかな

乾びし土のほひに咽び入る煙草畑の黄なる

夏の日

日に焼けし黄いろき肌に咽び啼く夏の真晝の  
ひぐらしの聲

夏の日の黄いろく饞えし夕ぐれのほひのな  
かにかなかなの啼く

ひまはりのかげより海の色をして風に動きて  
秋立ちにけり

夏去ればわが肉體の弾力のおとろへゆくか漸  
くかなし

秋の立つもろこし畑に風を追ふ大きく赤き朝  
の太陽

トマトの畑を遠く風過ぎぬ風の後追ふ朝の  
かなしみ

落花生の金の花咲く沙畑に胸ひきしむる蟋蟀  
の聲

冷え冷えと生姜畑にこゝろよく飢をおぼえて  
朝の海さく

納屋裏の薊の花にたかりたる金蠅に照る秋の  
日のかげ

風さらさら木賊の莖のすれちがふ音の冷たく  
身に沁む夕

朝の海掌にせる白き貝殻に胸にほのかに雲の  
反射す

つゝましき人差指の縋帯を唇にあてつゝ海見  
る少女

秋となり残り少なき避暑客の渚に出でゝ遊ぶ  
夕ぐれ

風空にかへりてゆくを見送りて夕渚に口笛を  
吹く



ダリヤ見る女の顔に反射する海蒼々とうれひ  
湛へぬ

湯上りの夕の椽に爪を切る爪の先より秋立ち  
にけり

秋立つ日つゝしみ深き少女子のそのさびしさ  
を思ひさびしむ

何かしらかぞへて折りし手の指の握りしまゝ  
にかなしかりけり

梧桐が白砂の上に線を曳く明るき夕ひぐらし  
の啼く

一の女二の女三の女と夜を風は海よりうたひ  
來るかな

君は泣くか魚鱗に光る夜のひかり光につどふ  
秋の顫音

ゴム櫛の油じみしを大切がりかきあぐる髪に  
夜の風吹く

盃に酒に漂ふ秋の夜のしづけさみつめ心すみぬる

うれしげにわがまなざしをまぶしがる瞳に秋の夜のはなやげる

逃れんとあせる心を捉へたる女可愛ゆし死なまほしかり

泣き疲れ寝入りし君が頬に残るなみだの跡を潮なりの這ふ

にくらしさおしろい花の黒き實に爪をあてつゝ海を眺むる

ひまはりが海の彼方に見送りし彼の太陽のおそろしかりき

ひまはりが砂に曳きたるやはらかきほの白きかげに風のつどへる

君も知るわがかなしさは夕ぐれて君の來ぬとき君かへるとき

月光よ生簀いさすに潮の満つるころ誘ひ出してはよ  
く泣きしかな

月あかりほのかにうすれ夜が明くる渚に黒き  
髪さびしがる

かき抱き波におどろき唇くちべを吻くひしらじら明け  
の夜をさびしがる

うらむなくうらまるゝなくいふこともなき明  
け方の木の葉のそよぎ

あたゝかき女の唇くちべを忘れえすうみほゝづきを  
拾うて鳴らす

君が爲ともにおそれし太陽を海にかへりてな  
つかしみ見る

たれかれの肌のぬくみと辨わかへぬ程とはなれど  
なほも残れる

海の風かくおとなしくなりし身を過去多き身  
をまたせむるかな

救はれぬ程に墮ちたる肉神を海に来てなほも  
てあましける

秋は来ぬこの春よりのもの疲れ癒えたれどな  
ほ不安おぼゆる

曼珠沙華死にとなれる戀のはておそろへて海  
にかへり来しころ

海に来て女は忘れはてたれど夜半におどろき  
眼の覺むる癖

天鷲み絲みがく木賊の音による風に冷たく秋の  
海はにほへり

秋の日に蘇鐵の幹の錆釘のにほふ夕は海邊は  
かなし

秋やうやく胸ひきしまりなつかしく一人の女  
にかへらんとする

秋の風濱の女の赤髪に吹くがとりわけかなし  
かりけり

ヒステリーの女の眸にうつりたる冷たく澄み  
し初秋の海

秋の海酒の如くにほひ出ぬ夕陽に對ひ髪を  
思へば

捨てられし碇の錆のにはひ出る黄なる夕陽を  
浴びて海見る

誘はるゝまゝこゝろよく流れたる涙かへらす  
秋ふけてゆく

肉桂の木かげに立ちてしみじみと海の上なる  
秋の目を佗ぶ

みだらなる顔あまた浮き嘲笑ふ夕陽冷たくひ  
ぐらしの啼く

日も海の彼方に落ちぬ熟みすぎし無花果の香  
の庭にたゞよふ

秋の日は一もと高き青冬の木に光を残し海に  
沈みぬ

夏去ればわが肉體もおとろへぬ彼の日光もお  
とろへしかな

うらやすしあまき煙草にこゝろよく酔うてき  
く夜の潮の遠なり

秋となり漸く海になれてゆくさびしさに涙あ  
たゝかう湧く

ふと氣付けば燕の群はいつか去り木の實を落  
す風のひかれる

くらやみの夜の渚に煙草の火赤く見えたり逢  
引の子か

酒飲まず煙草も吸はずしみじみと秋に酔うた  
る夜のこゝろよき

日が落ちし後の明るさ傾斜せる蕎麥<sup>そば</sup>の畑を風  
遠く去る

しめりたる土のなかより芽を出せしキャベツ  
の朝の日をおそれ居る

投げ捨てし煙草の煙のたゞよへる秋海棠の雨  
に暮れゆく

あたゝかう涙に濡れて潮の音にたやすく覺め  
ぬ初秋の朝

やはらかにぬくみの床に朝な朝な残る秋とは  
いつかなりけり

大木の幹をはなれし蔓草の風に吹かるゝ初秋  
の朝

酒舗のしたみのはひ、花嫁のさびしき夕こほ  
ろぎの啼く

秋の夜を疊を這へるさびしさの膝の上にとの  
ぼり來るかな

うすあまき煙草の酔ひのさめはてし秋の夜ふ  
けはしづかなりけり

夜ふけて枕をめぐるさびしさにおどろかさ  
れ  
てまた覺めしかな

秋の夜は虫の音よりもねがへりしうしろかげ  
よりさびしきはなし

しめやかに沙鐵の壁のほひ出る雨ふる夜半  
をかすかなる蟲

あたゝかき鹽湯の後の體温に程よくにほふ水  
仙の花

こぶしもて獸の如くよろこびてたまたま落ら  
し涙をぬぐふ

幾人の女を捨てゝかへりみぬ男と秋と連れ立  
ちにけり

わが歌の活字となりしそのにほひわけなく秋  
はさびしかりけり

熊蜂クマバチの羽音をきけばその螫はに刺されたき程秋  
はさみしき

だらしなき肉の漸くしまり來て秋はわがもの  
の如くなりぬる



酔のけなき如き心地に疲れたる肉體をめぐる  
煙草の毒よ

いちはやく銀杏の葉が黄ばみたりわが肉體を  
油のたぎる

疲れはて甘きもの欲るしきりなりカンナの花  
のしほれゆくころ

佗びなれし血の氣少なき肉體の痺るゝ如き蟋  
蟀の聲

媚つくる腫疲れて夜ふけてなみだぐむとき満  
足をす

興ざめし女の顔に夜が明けて秋はさみしくな  
みだを誘ふ

疲れはて眠る二人よ明け方を木の實の落つる  
音しきりなり

初秋の日光を吸ふ草花を眺めてやゝに汗ばめ  
る女

沙にうつるとんぼのかげに誘はれし心よ午後  
の潮の香に酔ふ

秋の夜をあまゆる心こゝろよくひきしめられ  
て髪梳くをさく

君眠るきめこまかなる真白なる肌にふるへて  
こほろぎのなく

いぎたなくみもち女の酔のものを欲るさびし  
さや蒜の花散る

しみじみとものおもひする女房の鐵漿つけし  
齒にひよくこほろぎ

日光はまたも一さわおとろへぬ此女の體臭も  
いつかなれけり

油たぎる肉體のたるさやるせなさ秋の日なか  
にもてあましける

間食になれし胃腑の飢おぼえ秋の夜ふけをお  
どろきて醒む

野をゆけば君がおそるゝかまきりの鎌にうで  
ける秋のさびしさ

コスモスは雨にぬれつゝそよぎつゝクリーム  
で拭く顔にひかれる

にほひなく饑えたる秋のうすあまき日光のな  
かに紫蘇の花散る

鳳仙花君を泣かせてかへしたる午後はらだゝ  
ししだらなく咲く

繻子の帯しむるかたへに鳴る音に心あまへて  
君をながむる

蠅に交りかなしみとなり秋の日の障子の棧を  
匄ひめぐらまし

疲れはて投げ出したる身を魂を冷たくそゝる  
蟋蟀の聲

なぐさむる術なく強く復讐の念燃ゆる瞳に秋  
のすみたる

投げ捨てし吸殻の火に迷ふ煙白く冷たく海に  
ほふかな

秋の海蒼々として海鯽釣る天蠶絲をしめす舌  
に冷たき

秋の風海蒼々と海鯽釣る蝦くはひたる唇を吹  
く

海鯽釣る撥竿のさきにたゞよへる藻のほふ  
なり初秋の海

つゝましき葱の畑に日のぬるむ午後茫然と潮  
なりをさく

潮の香に酔うたる如くかげろひてとんぼ飛ぶ  
なり蒜の花咲く

綿つけし木綿畑にたゞすみてこほろぎをさく  
潮なりをさく

餘念なく榎の實喙いばむ鳥の瞳も惘しく秋は  
すみであるかな

藁<sup>わら</sup>の實で染まりたる齒を出して笑ふ子供に  
秋風の吹く

驅け來り洩すゝりつゝ街角に飴屋をかこむ子  
供の群よ

指の疵しきりに痛む夕ぐれをなぐさめかねて  
海に來りぬ

磯ゆけば水のなかにとかくれ入る蟹より惜し  
きわが生命かな

蒜の花さびしき心もてゆけば赤とんぼ等もま  
たとまり居る

朝毎に脚氣の癒ゆる足かろく茗荷畑にこほろ  
ぎをさく

なまぬるき秋の日なかに耳の鳴るおぼえてた  
えず落花生かむ

腐りたるこの魂を捨てゆかん芥溜<sup>かゐだら</sup>のなかに薊  
咲き居る

秋の海色情狂の腫の色に蒼々澄みて日にほ  
ふかな

夕ぐれの風が落葉を吹き捲くる唇の皮乾きて  
落つる

吹矢もて楨の實際いばむ鳥ねらふわが少年の  
秋知らぬさま

晩秋の雲の眞赤に燃ゆる夕倉にしのびて酒糟  
を喰ふ

食慾の進む肉體の心地よさ海をながめてなに  
かおもへる

夕ぐれのあまき憂愁に疲れたる心を秋の蒼海  
に投ぐ

冷え冷えと海のさ蒼にうちひたり生命青ざめ  
煙草くゆらす

蜜柑むきて黄によぞれたる瓜に泌む夕日冷た  
き水仙の香よ

晩秋の日光のなかに木の葉散る悲しき愛にお  
ぼれし心

晩秋の秋の日なかに色盲の女笑へばカンナ笑  
へる

犬ころをつくづく見れば人間の面おもてによう似て  
眼になみだぐむ

なまぬるくおどめる秋の日のなかに番ばんひしま  
まに死にゆく蠅はよ

鉢植の菊を日向に出してやりそのかたはらに  
なみだぐみぬる

おどろきてみもち女の眼さめたる飢うをそゝり  
てこほろぎのなく

秋あき晩く果物くだもの籠へて腐りゆくにはひのなかにこ  
ほろぎのなく

林檎りんごむく女が持てる青白きナイフのさきさきにこ  
ほろぎのなく

肉を煮るにほひのなかに蟲のなく葱の白根の  
白く冷たく

濃緑の木の葉にひかる晩秋の日光に冷ゆる風  
に眼痛し

眉を剃るかみすり持てるとしまの手かすかに  
ふるひこほろぎのなく

逢ひにゆく夜ふけの袖に見出でたる一つの蜜  
柑に寒さおぼゆる

咒はれし愛に生命をかたむけてあればか冬は  
殊にさびしき

咒はれし愛を二人でいつくしむ夜をにほふな  
り水仙の花

水仙のにほひのなかに君が持つきせるの銀の  
冷たくひかる夜

水仙の花の冷たくにほふなり腹立ちて君のか  
へりし夜半に



君が泣くそのかたはらに眼を閉ぢて煙草吸ふ  
とき寒さを感じ  
かへりゆく君が姿のうらさびし白く明るく霜  
ひかる朝  
いや遠く愛はわれらを離れゆきかつ離れゆき  
いづくにゆくらん

(自一九一〇、一九一  
至同)

夢  
見  
る  
花

去りゆく愛

夢に見ぬ鳥に似たる黒き鳥君とかはりて悲し  
かりし鳥

シヤボン浮く微湯わかゆにひたり呪のろはれし戀のをは  
りをしみづく思ふ

水仙の萎れしまゝに挿してある女の部屋の夜  
のぬくもり

福壽草匂袋の帯すべる春の灯かげの波にくづ  
るゝ

水仙の萎れし花に黄に咽ぶ灯かげに光る眞黒  
な髪

肉縁の悲しき末を思はする夜の寒さに相抱き  
て泣く

ふと妻の如くに思ひ叱りやる女の顔の淋しか  
りけり

呪ふべき悲しき戀も呪ひ得ぬ男に笑ふ黒き死  
の顔

初春の夜のにほひにうち咽び去りゆく愛を悲  
しがるかな

沈丁花にほふ夕のうすあかり唇をはなれし唇  
の冷たさ

黒髪は悲しき愛のさめぎはの夜毎の夢にはほ  
うて悲し

かなしみに残して愛の逃れゆく彼方に春の空  
かゝやける  
君よわれらが愛はいづくに逃げゆきし空の彼  
方に春來るさびしさ  
傷きし鳩の胸毛のふるふごと悲しかりにし愛  
なりしかな  
とこしへにかへらぬ愛か空遠くとこしへにま  
たかへらぬ愛か

春のおとづれ

手をひろげて彼の大空に抱れなむ晴れたる空  
のゆるう呼吸する  
白梅咲き鳥鳴く空にあたゝかきわがかなしみ  
は雪の如くにほふ  
湯あがりの肌やはらかく白梅に冷たくにほひ  
二月よ悲し

うらざむき朝のにはひにうち咽びわが泣くそ  
ばに鶯の鳴く

酒ふくめば春の寒さのにはひ出づ病あがりの  
おとろへし身に

こゝろよし二月の朝の酔醒の水におぼゆるう  
らざむさかな

酔醒の冷たくあまくこゝろよき水飲みながら  
鶯をさく

春めきし空の彼方にやはらかき疲れおぼえて  
かなしみの湧く

蜜蜂の羽音しづかに鳴り出でぬ木の間甘き  
日かげしたゝる

春は来ぬおどろきやすき君が腫の黒くうるほ  
ひかゝやく空に

黒髪のひかりにそよぎ春は来ぬうれしき春の  
またかへり来ぬ

春となりぬ醒めておぼえぬ夢多き淋しき夜の  
うちついでかな

空のはてわがさびしさの息をつくあたりに見  
ゆる薔薇色の春

君戀へば空に明るむ薔薇色の春のかげにもお  
どろかれぬる

かみの毛まで若き生命の血がかよふこのくる  
はしき春來る春來る

### 二月の夜の歌

梅の香のそとしもなくにはひ來る二月の夜  
の赤子の泣き聲

白粉のにはひに疲れ梅の散る女の部屋の夜の  
灯の色

夜は更けぬなみく注ぎし盃のなかに泳げる  
赤き魂

うるはしく酒のにはひの渦を巻く盃のなかに  
魂を投ぐ

戀がらと煙草の殻とちらばれる上に疲れて夜  
はさまよへり

ニコチンの毒に誘はれ神に似る獸の前に心蒼  
ざむ

疲れたる畜生の如く横はり壘を爪でかきむし  
る態ごま

三味もなく唄ふ女のかなしさは盃の底に苦く  
澱める

強ひられていや／＼ながら飲む酒の苦さに燃  
ゆる青さかなしみ

ともすればうらさびしさの襲ひ來るみなれし  
顔をつく／＼と見る

白粉のにはひにうすくよごれたる春の灯かけ  
にわれをみかへる

あはたゞしく君がおどろく顔を見に逢ひに來  
し夜を泣かれてかへる  
やるせなくなぐさめられに來し心逢うてかな  
しさ増すこの心  
他愛なき君が仕業しわざに腹立ちてふところ手して  
かへるさびしさ  
うしろよりわれを呼ぶ聲笑ふ聲梅のにはひの  
冷たき夜かな

疲  
れ

誘惑をいなみ得ずしてひきすられひきすられ  
ゆくさびしさに生く  
身も魂もゆるみはてたるこゝろよさあまき疲  
れに眼ざめけるかな  
こゝろよくゆるみはてたる關節に春の寒さの  
泌むがつれなし



梅の散る木かげに立てば朝の日にわが酒息の  
にほふがうれし

梅の花散り盡したるあたゝかき二月の朝の日  
のにほひかな

春の霜残り惜しげにかへりゆくあとばのあと  
に光りて消ゆる

午近く君をかへして日にむかふ心はあまき疲  
れおぼゆる

春の日の土のにほひに咽びゆく俤に媚ふるた  
んぼゝの花

菜の花のにほへるなかに泳ぎたるわが魂の日  
に光り見ゆ

菜の花の日に蒸<sup>か</sup>されたるいされたる汗ばむ肌  
に生ぐさく沁む

日に白くかすかにふるふ指先に觸<sup>ふ</sup>れて黄に散  
るたんぼゝの花

つまらなし汝がおどりのかつぼれも春が遊び  
のおたまじやくしも

我儘のなみだに午の日光にいらく光るえん  
どうの花

君を騙し君をおだてゝやうやくに肩もませた  
るそのつまらなさ

戀をするわれらが前におどけたる春がおどれ  
る赤い顔かな

### 夜の鳥

ねそびれしわが魂を喰ひに來よ春の夜ふけの  
月夜がらすよ

さびしさか愛か女の誘惑のたゞうれしくて春  
の夜の更く

寝るひまにわれらが戀のうばはるゝ心地に春  
の夜の胸さわぎ

たよりなき女心のさびしさか我儘のはてにま  
たも泣き入る

我儘の昂じて終に泣き伏せし脊に手を置きて  
春の灯を見る

眼ざむれば青みて春の灯は點つるよう眠る子の  
憎し可愛ゆし

すや／＼と眠る女の魂を照らして春の灯の  
ほふかな

みちか夜の明け方近く夢に入り聲立てゝ去り  
し眞黒なる鳥

春の水流るゝ音もうちまじりなやましかりし  
夢なりしかな

みちか夜の明け方近くおぼえざる悲しかりに  
し夢なりしかな

魂のぬすまるゝをも知らずして眠るふたりを  
うかいへる鳥

みぢか夜のしらぐあけの明けがらす鳴くと  
ばかりにさまされし夢

春の夜の更けゆく音にうちまじり悲しかりに  
し音なりしかな

夜ふけて枕をめぐる水の音の髪梳く音とぞか  
はりゆくころ

太陽をおほふ黒羽の鳥一つ夢にかげりていづ  
くに去りし

### 北條の一夜

おもひでは春の夜はたゞ忘れ得ぬ黒き瞳とな  
りてかゝやく

松かげの家のほとりにこゝろよく俤をはこぶ  
春の夜の風

おもひでに黒き瞳にしづやかにあつまる夜の  
うつくしさかな

今迄は顔のみ知りし女ども來ては酒酌む今宵  
のさびしさ

うす黄なる酒のほひの渦を卷くなかにあつ  
まる夜のうつくしさ

黒髪のにほへに咽ぶ春の灯のかげにひそめる  
夜のさびしさ

黄楊櫛の油じみしにやはらかくあつまる春の  
夜のぬくもり

さかりつきし猫の黄いろき泣き聲にゆらぐ灯  
かげに笑へる女

何を泣くや兩手に顔をうづめたる女よまたは  
何を笑ふや

菜の花のほひに光り白粉の散る横顔の悲し  
かりけり

さかりつきし猫のときよな泣き聲に泣くや  
うにして笑へる女

君が手の冷たく悲し満々と闇に光れる春の夜の海

春の夜のうすらあかりにわが胸にひるがへり  
来る薔薇色の波

手を取りしまゝにふたりは疲れたり春の渚の  
星あかりかな

人妻よ君が赤子の泣き聲にそゝられながらわ  
れ酒を飲む

あげひばり

かへり路の河原柳に日のさせば身にうつり香  
の淡く沁むかな

やはらかき朝の心の日を浴びてふくらむ梨の  
蕾見てある

戀疲れ彌生はじめの若草の呼吸するなかに眠  
りを思ふ

春の野に雨降る日なり戀をする心こころにも乳の如  
き雨降る

河柳の糸をつたうてすゝりなく雨につれなく  
わが心かな

戀をする心をなで、河柳の糸をつたうて春の  
雨降る

春の雨しづかに夜を降り出でぬふたりの心お  
ちつきて來ぬ

何もかも茫つとしたるあたゝかさ寢醒さびし  
くなみだを誘ふ

やはらかきぬくみに夢にもものたりぬさびしさ  
に春の夜の明けてゆく

何はなく煙草を持てる指先のわれとふるへて  
悲しき朝かな

あはたしくこみあげて來るさびしさにわれ  
どわが手を虚むなしく握る

牛の子の乳房にすがり眠れるを戀ふる心にあ  
かず見てある  
あげひばり揚りし空を眺めやり淋しとわれに  
より給ふ女  
うすら残る肌のぬくみにダリアの芽朝の日な  
かに黄いろく煙れ  
別れ來し心に夜は明けてゆくひばりの唄の空  
に流るゝ

### 三月の夜の歌

据ゑし瞳になみだ浮べて誘惑を待つ子のあは  
れ美しきかな  
青みたる煙草の煙の渦巻けるなかに女の瞳の  
血ばしれる  
いざゆかん煙草の毒が連れてゆく蛇の子供の  
遊べる群へ



眞赤なる春の心を喰ふごとと舌うちしつゝ酒飲  
む女

蛇の如く煙草の煙けむりの黒髪にうねりゆくとき君  
笑ふとき

猫を抱く女の膝の弾力と眞赤な春の夜のぬく  
みと

灯がふけてその眠たげな横顔を毛蟲の如く這  
ひあるくとき

運命のうすら笑ひに媚つくる女の顔の淋し  
かりけり

疲れたる夜がふけゆく眞赤なるひびきにふる  
ふ煙草のけむり

眞赤なる夜のぬくみにくま探られ探られつゝ唄へ  
る女

ラツパ節唄ふ女のうす暗きうしろに春の夜が  
欠伸あくびする

眞赤なる唇残しはてしなき闇は闇にとうち沈  
みゆく

春の灯にあらゆる悪に飾られてあはれ女の魂  
の眠る

悪運の強き女の魂の灯かげに眠るうつくしさ  
かな

ふら／＼とおのが寢宿にかへる夜の足もとを  
吹く三月の風

### 濁れる空氣

蕾もつ櫻の枝に雲光りものうき晝を肌の汗ば  
む

なまぬるき春の日は照り日は曇り戀する胸の  
なやましきかな

番つがひたるまゝに眠れる蝶を見る春の日なかの  
ねむげの腫

やはらかに眠り不足の眼に沁みる林檎の花を  
散らす微風

なつかしき旅の心となりにけりうすあまき日  
に梨の花散る

やはらかき朝のねざめのこゝろよき皮膚に冷  
たく梨の花散る

春の雨いとしめやかに降り出でぬ心明るく夕  
ぐれとなる

うす濁る空氣明るく菜の花に日の照るなかを  
君笑ひ来る

熱心に赤き薔薇をみつめたる女の額に汗の滲  
める

赤き花散らしたる日のだらしなき君が膝へと  
来て遊ぶかな

かへりゆく銀杏返のかなしげのうしろ姿に日  
のかげりゆく

薔薇の花日に腐り散るかたはらに眠りを思ふ  
疲れし心

こゝろよく腐りて落つる花を見て眠たき心な  
にかあまゆる

腐りたる花散る如く疲れたる心に落つる晝の  
眠たさ

赤き花春の日なかに碎け散る音なき音の肉體  
にひしく

### 夜の花

くちづけに疲れたる身をよせかけし柳に白く  
花のひろがる

ぼたくと卓の牡丹のかさなりて灯かげに夢  
のかさなりて散る

くちづけを待ちてそよげる赤き花残してあた  
り暗くなりゆく

死のかげが軽く心を脅<sup>おびやか</sup>す白粉の香のあまき夜の部屋

黄なる花レートの瓶の水を吸ふ女の部屋の夜のあたゝかさ

夜の部屋一輪挿のーりんの花を散らして白粉にほふ

白粉のにほひに白く咲き出でしかなしみの花  
春の夜の花

春の夜のうすくらがり<sup>ら</sup>に光りたる真赤な花と  
われらが戀と

緋の牡丹くづるゝ如くはてしなき闇はしづかに動きぬるかな

夜の花赤くたゞれて疲れたる心の上にくづれ  
かゝりぬ

夜の底へ闇の底へと墮<sup>お</sup>ちてゆく心に赤くくづれたる花

みぢか夜の夢にほのかなうすあかり投げて散  
りにし花なりしかな  
くたぶれし心の上にかさなりてかさなりて散  
る夜の花びら  
みぢか夜のうつゝなかりしその夢を赤く染め  
たる花なりしかな  
黒髪のかげより一夜わが夢を見まもりし眼よ  
り夜は明けぬらし

潮干がり

戀しさは海一ぱいにはてしなく空一ぱいにひ  
ろがる朝かな  
なれくしく君が袖ふるかたに啼く群をはな  
れし一羽のかもめ  
菜の花のかんざし挿した黒髪に冷たくにほふ  
春の海かな

春の日のけぶれる海に漂へる彼方の富士の雪  
解のにはひ

おどろきていそぎんちやくの水を吐く磯の  
ほひのなつかしき晝

音たてゝほのかにけぶる吸殻にあつまる晝の  
海のしづけさ

菜の花を散らして海へゆく風に吹かれて遠く  
富士のかすめる

君も知らずわがかなしみを胸に抱いて鷗とな  
りて海に浮く日を

かもめかもめ小さき胸に抱く戀の狂ほしさに  
飛びまはるかや

夢を追ふ君が瞳にやはらかく溶けてにほへる  
春の海かな

このまゝに眞珠の如きうるはしき戀を抱いて  
海に沈まむ

晴れ渡りし朝の海にうつりたる白鳥のかげわ  
が戀のかげ

やはらかく朝の海に漂へる日かげに淡く残る  
夢かな

海、海、海、君が心の春の海われの心の戀の海か  
な

ひた／＼と潮は足を拂ふとす戀によるめく足  
拂ふとす

と  
か  
げ

穂を孕む麥の畑の中に立つ腐りたる血の肉體<sup>かみだ</sup>  
をめぐる

穂を孕む大麥の上をさまよへる戀に戦ふ赤き  
魂

穂を孕む麥の上を吹く温風<sup>ぬかかぜ</sup>の皮膚に觸りてう  
つゝなき晝



さびしさは春の日なかに漂へるうすら冷たき  
空気に觸るゝ

猫の腫か忘れて知らぬ女の腫が春の日なかに  
濁りて輝く

大麥の熟るゝにほひが午すぎの日を濁らして  
むしあつきかな

唇を流れたる血のむづかゆさ大麥の上に風の  
光れる

つ 黒髪は蛋白色に輝ける四月の朝の空に音を立

春の夜の嵐のあとのしだらなき牡丹に見入る  
疲れし心

やはらかく心の上にかさなりてなまぬるき日  
のかさなりて照る

戀をする心腐らす日光に海棠の花も腐りて落  
つる

くちづくるかたへの花に眠りたるとかげの春  
に遊ぶ春の日

戀人の憎らしき睡を思ひ出づ春の日なかに眠  
れるとかげ

氣まぐれに小さきとかげの這ひ出でぬ君を憎  
みて行く麥畑に

麥畑に春の日なかに思ひやる女の黄なる血の  
なまぬるさ

### 四月の夜の歌

暮れてゆく四月の空に浮き出でしきちがひじ  
みしわが戀すがた

戀すれば林檎を噛めば春の灯のほひ冷たく  
齒に沁みわたる

窓に倚れば曇れる空に春の夜のほのあかりさ  
しなみだぐまれぬ

さびしさに追ひ立てられて君にゆく花散る春  
の夜のうすあかり  
月の聲櫻葉かげに満ちわたる春暮れ方のもの  
のあかるさ  
あてもなく四月の空を追うてゆく心にかよふ  
夜のうすあかり  
春の夜のなにかさびしき誘惑にひきづられつ  
つ花かげをゆく

濁りたる四月の空のまぼろしに赤子の赤き聲  
に鳥啼く

月の出に黄いろく遠くかはす鳴くわれを見る  
瞳の濁りてかゝやく

明け方の空に月あり春の夜の胸やはらかく重  
みおぼゆる

やはらかく月のひかりに誘はれしなみだしら  
じらしらむ春の夜

眞赤なるわれらが戀の欲しさにか春の夕を飛  
べるころもり

夕ぐれの淋しき空にうすぐらきわが心より飛  
で出でし鳥

けたましく戀の欲しさに狂ひ鳴く鳥におど  
ろき赤き花散る

過ぎ去りし戀ものがたり一つづまぼろしに  
して紅椿散る

暮 春 調

春が徂くうらさびしさと疲れたる戀と夜毎の  
夢にかげする

ゆく春のうすらあかりの消えて入る白粉はげ  
し冷たき横顔

春が徂く敢果なさせめて身につける女の肌の  
にはひ捨てたし

ゆく春の柱鏡がうつしたる女待つ間のわが浮  
かぬ顔

尾を垂れし犬のあとよりついて来る去りゆく  
春の浮かぬ顔かな

大腹の濱の女のよちくと歩む姿に春の去り  
ゆく

濁りたる空氣のなかに浮びたる唇を吹くゆく  
春の風

ほのかなる春の夕のあかるさをあつめて光る  
小田巻の花

白粉のにはひ黄いろき春の灯のかげおもたげ  
におだまきの散る

乳首のいたさをかこつ女房の泣顔なみかほ笑ひ桐の花  
咲く

桐の花白粉はげし横顔に冷たきひかり投げか  
けて散る

山吹の萎れゆくころわが戀の亡びゆくころ春  
のゆくころ

水銀の剝げし鏡にうす笑ひうす笑ひつゝ春の  
去りゆく

春は徂く戀の心を濁らして君が瞳を濁らして  
ゆく

何か淋し始めて肉體よごれたるものうさに降  
るゆく春の雨

たそがれの夢見るとしもなき胸に戀する胸に  
春の雨降る

こゝろよく花を散らして降る雨に明るき胸に  
ひやく死のかげ

しとくくしとくくと春の夜の雨に誘は  
れ寢にゆく心

春の夜の雨にくづるゝ赤き花夢にくづるゝ  
き戀かな

花をのみ趁ふ春の日と戀をのみ趁ふこの胸と  
このさびしさと

遠き遠き遠きおもひに赤き花紫の花咲きてく  
づるゝ

死のかげにいざなはれゆく魂をみおくれるも  
のゝ夜のうつくしさ

藝術と愛に捧げしわが生命ほのかに照らす死  
のうすあかり

(自一九二二、二  
至同 四)

### 藝術と死と

足もとより空のあたりへにはひゆく四月の空  
の肉色の風

春の夜のうすらあかりにかげうすきわが魂の  
いざなはれゆく

あたゝかきうすら冷たき夜の風風のひかりに  
誘はれてゆく

夢ともなく疲れし魂を誘ひゆく四月の空の花  
あかりかな

戀か死かなにをか神のたまふらんなにか明る  
く胸にかげする

いづくやらんわれの住むべき國ありて今しお  
ぼろの月照ることち

あまり悲し戀の終りにおぼえたる運命として  
あきらめんこと

夏の呼吸



やはらかにく明るき胸に死の如き淋しきかげす  
指の冷たさ

暮れてゆく蛋白質の夕空にとり残されし淋し  
き心

たそがれのうすらあかりに甦よみがへるこの魂をいざ  
なひに來よ

夕ぐれのにほひのなかに浮び出づわれを誘ひ  
に來る死の顔

酒が滲む肉體の痛さこゝろよさ暮れゆく空は  
赤くふるへる

三味弾けば心やうやくおちつきぬ濡れてかゝ  
やく黄なるともしび

黄なる灯のにはひのなかにかはず啼くうるほ  
ひもなく濁れる腫

うつとりとあまき眠りにあやかされある腫に  
うつる黄なる灯のかげ

燃ゆる燃ゆる盛んに燃ゆる新緑のうれひぞも  
ゆるよるこびぞもゆる

新緑のにはひ冷たくこゝろよき皮膚の痛みに  
眼を閉ぢてあり

唇を流れたる血のやはらかく青葉にかよふ晝  
の日光

やはらかく夜の青葉がうつしたる髪のにはひ  
に蠟燭を點く

手をとればなせかかなしさ胸に湧く青葉の夜  
のものゝあかるさ

明け方の緑のなかに美しく織り出だされしわ  
がかなしみよ

麥熟るゝ夏のほひのむしあつく汗ばむ肌  
に生ぐさく沁む

夕ぐれの月のほひにほる酔うてねぐらにか  
へるつばくらの群

夕ぐれは軽く大きく羽ばたきす戀に戦ふ赤き  
心に

翹よわきつばめの子らにうちまじりわがかな  
しみの遊ぶ夕ぐれ

うしろより冷たく白き手をひろげさびしきわ  
れを捉へんとする

死がかげを戀する胸にやはらかく投げたる五  
月夜のしづけさ

濕りたる五月の夜のしづけさに白う流れしあ  
まきかなしみ

袖の花ひるがへり散る夕ぐれの明るきなかに  
心あまゆる

たそがれの空に明るむ水色の月のにほひに咲  
き出でし花

しつとりと露に濡れたる心持ちほのかに照ら  
し月の夜となる

夏は來ぬ汝が黒髪美しくしたゝる如くさび  
しさの燃ゆ

麥秋の黄ない明るきかなしみのなかにとんぼ  
のむらがりて飛ぶ

唇の熱さ忘れし唇を酒にひたせばさびしさの  
燃ゆ

撒き捨てし薬のにほひにほひゆく庭に黄いろ  
き棕櫚の花咲く

木の影がながくと地に線を曳く其晝を胸に  
冷たさかかげする

痛む齒に薄荷をつけるやるせなき心なだめて  
茴杏の散る

馬鈴薯の白くむらがり花の咲く夕ぐれ方を聞  
道をゆく

湯上りの軽くなりたるからだをば木の間に運  
ぶ明るき夕

死のかげする烟管の銀の冷たさを唇におぼゆ  
る五月の夕

白き花水の面に暮れ残る夜を悲しむ銀笛の音  
よ

丸まげの紅きてがらに風遊ぶ夏の夕の水引の  
花

水引の花のゆらぎにはつきりとわからぬけれ  
どやせたまひけり

ゆたかにも朝の日ざしの流れたる廊下に出で  
て君髪を梳く

葉がくれに青き木の果の育ちゆく六月の日の  
うすあまき朝

かへり路のとある垣根に朝顔の萎れゆく日に  
淡きうつり香

葉がくれに青き木の果を見るも憂し君をかへ  
せし後のさびしさ

太陽のにはひ冷たく沈みゆく海を見ながら俤  
にありぬ

煙草とり俤の上にマテ摺りぬ夏の夕の風青き  
なか

夕ぐれの松原に来て泣く君が髪に這うたる毛  
蟲も悲し

強ひられて宿る心のおちつかぬ黄なる灯に揺  
れ啼くほとゝぎす

うすあまく夜は深みぬしづやかに君が顔這う  
黄いろき疲れ

掌てのひらにほたるのひかり玩もてあそぶ女の髪と蚊帳のには  
ひと

うすら残るキスのあと見るかなしさよ君が掌て  
に死ぬほたるのひかり

ねはぐれし心にけぶりかたはらの女の顔の黄  
いろく燃ゆる

六月はわが戀人の黒髪とわれの心と濡らして  
けぶる

水色のうれひのなかにほのかにも初夏の花咲  
き出でにけり

蜘蛛の巢の白う光れる夕ぐれのものゝかなし  
さ人の戀しさ

果物の熟るゝにほひのたゞよへるかはたれど  
きの涙のあまさ

木がくれに木の果の光る六月の夕淋しく人の  
待たるゝ

袖の葉のそよぐさびしき黒髪のそよぐさびし  
さ月白うふく

夕ぐれは濱の娘の屋臺曳く揃ひゆかたと共に  
遊べる

ざんざらのかけものかけし濱の娘の髪に祭の  
夜のふけてゆく

かみなりに魂とられ青ざめし女の顔にくちづ  
けをする

湯上りの肌うつゝなく紫陽花の泣きたい色に  
日のかげりゆく

五月雨の心の雨のなやましき赤く光りて薔薇  
の花散る

うす暗き心に重くかさなりてかさなりて降る  
五月雨の降る



いらだゝしきまゝに女を叱りやる男を笑ふ  
柘榴の花よ

そことなく硫黄のほひ皮膚に沁む暗い心に  
五月雨の降る

腐りゆくこの戀がらをなめに來しへいはち蟲  
の壁に這ふかげ

さみだれのはひほのかにゆれてある壁に心  
のかげのうつる夜

夏、夏、夏は柳の三味線の絲をつたうて青くし  
たゝる

夏の花鶉とぎどり色の花戀の花見てある心あまくけぶ  
れる

みづすまし水を澄ましてかけあるく夏の夕の  
おもだかの花

すいゝと夏の夕の水の面にわがかなしみに  
とんぼ水飲む

河骨咲く<sup>ヒナ</sup>鱗のにはほひのするどくも皮膚を刺す  
夜のうすらあかりに

蛙なく夜の心のくらがりに人戀しさのうすら  
あかりに

焼酎の如くすみたる夕ぐれのにはほひのなかに  
蠟燭を點く

南國の甘きバナ、の熟るゝ夜か胸に波うつ灯  
のにはほひかな

いらくくと尖<sup>とが</sup>りて痛き神経に夏の雨降り夏の  
花散る

猫を抱く心さびしさやるせなさ外には赤き夏  
の雨降る

あてもなき人戀しさに氣まぐれに明るき空に  
夏の雨降る

虚死<sup>そとじに</sup>の金魚の憎き青白き腹に光りて白雨<sup>ゆふ</sup>の降  
る

かなしみの心に雨の降る空に赤くふるへてか  
なくの啼く

月がさす暈をめぐりて淋しめる夏の夕の人戀  
ふ心

なめくじのあとほの白う暮れ残る舟板塀によ  
り添うて抱く

やはらかく夏の心に降る雨は明るくなげき夜  
となりけり

朝早く夏はしづかにさまよへりアスバラガスの  
畑の上を

くたぶれし若き心にひるがへる夏の眞晝のひ  
るがほの花

汗ばめる肌ものうくうつゝなく薄黄にそよぐ  
夏菊の花

にがよもぎ温氣の強い曇り日になにかさびし  
くそよぎてかあるな

曇りたる心苦しき夏の日の温氣に蒸れて茄子  
の花散る

茄子の實の紫色の黒びかり暗い心に見る黒び  
かり

秋はまたさちがひなすのさちがひの花のかげ  
よりかへり來ぬべし

柿の花暗き心に夏の日のうすら曇りに果とな  
りにけり

あゝカンナ晝のさかなに酒を飲む煙草にあれ  
し舌に焼けつく

黄にぼやけ鈍りきつたる神經にどくだみの花  
光る午すぎ

きよとくとと瞰みかへして逃げゆさし鼬のあ  
とに光るとくだみ

夏草のいきるゝなかに立ちて吸ふ煙草の味の  
わるにがきかな

蒸し暑き曇りたる日よ咽喉かはく身に熱病の  
淋しきかげする

百日紅乳の酔つばさうす苦さ泣く子をだまし  
赤き花散る

合歡の葉の眠れる晝のしづけさのなかにそよ  
げる風と死のかげ

うたゝねの夢にはのかなうすあかり投げて咲  
くなりさいかちの花

戀をする若き心を脅かす夏の夕の雨のひかり  
よ

やるせなきわれらが戀をもてあそび憎らしき  
雨赤き雨降る

夕ぐれの明るさ胸の明るさに思はせぶりの夏  
の雨降る

三味線の浮いた調子に雨は降り沈む心に夏の  
夜は降る

夜の女晝の寝ざめのねぼけたる顔に笑へる赤  
きカンナよ

くちべにをつける鏡にうすけぶりおいらん草  
に日のかげりゆく

日もかげり夜の女の夜を待つ腫に燃ゆる黄カ  
ンナの花

三味線の弾き捨てられし夕ぐれのはひのな  
かに玉蟲の飛ぶ

日もかげりおしろいの花咲くころとなれば淋  
しくはなやぐ心

夕ぐれの濱撫子に風が吹くなかに悲しき胸に  
風吹く

黒髪の青く濡れたる美しさ海に對<sup>むか</sup>へる夜の風  
の部屋

かはたれのうすらあかりに誘はれし涙に重き  
波の音かな

かはたれのうすらあかりにきぬぐの涙に濡  
れてかなくの啼く

うす黄なるかほちやの花のなげくよなひるが  
へりより夜は明けにけり

ほゝづきを熟ましてけぶる七月の日に肉體の  
衰へてゆく

藍の葉の冷たき色にひるがへりひるがへりつ  
つ夜の海鳴る

(自一九二、七五  
至同)

葦の葉の戦ぎ

大川の水の流れにまかせたる心はまたも君に  
ゆくかな

川岸の灯が柳の糸をつたうとき悲しき水に流  
れゆくとき

夕されば潮<sup>うしほ</sup>は川に満ち来るかなしき胸に胸に  
満ち来る

晝は見ぬ夜天を焦<sup>こが</sup>すセメントの煙突の火に心

び



夕月に荷足の舟の舫<sup>ふね</sup>ひ居る大川端に君思ひ立  
つ

三味線の柳の糸のすゝりなく大川端の夏の夜  
の月

ひたくと大川端に夜の胸に月に光りて潮の  
満ち来る

三味線の浮いた調子にうかくと濱町川岸を  
月と浮かれる

なつかしき受話器ほのかに聞え来る聲も明る  
き夕ぐれの海

夏の夜の女盗みに来る舟か眠れる海に櫂<sup>か</sup>の音  
する

すやく眠る女を盗みて海の底にかくさ  
む

紅蟹が夕の磯に遊ぶよな泡を吹くよな夏の夜  
の夢

黒髪の一すぢごとにやはらかく光りてにはふ  
夏の夜の風

灯をしたたひ來りし虫のほのぐらき海の方へと  
飛びゆきしあと

ねそびれし夜の心のさまよへる部屋にけぶれ  
る波の音かな

黒髪のそよぐさびしさしらぐと夜は海より  
明けはなれ來る

餘念なく湯殿に黒き髪を解く女を覗く男と月  
と

かなしさのうすらあかりにわが胸に月にそよ  
げる洗髪あらひがらかな

くちづけを忘れて遠く眺めやる海の上なる夏  
の夜の月

青ざめし額にそよぐ月光にくちづけしまゝ死  
をねがひけり

満潮みちしほに舟を繫いで上り來る人のうしろにま  
い月出る

白楊の木かげに夏の夜のふけを黄いろき月の  
ねぼけて笑ふ

髪かみの香の月のひかりに黄ばみたる肌はだに沁みて  
悲かなしかりけり

ほんのりと月のひかりの流れたる海うみに心の海  
に雨降る

花骨牌はなぼねを切る疲れたる瞳ひとみをはなちやる眞晝まひるの  
海の赤きまぼろし

寝ざめ淋しく晝の心にうつりたる眼まなこのまはる  
よな赤い海かな

灯あかりを點ける白き手先ての先を脅おびやかし海より追る白き夕  
ぐれ

こゝろよき肉體からだにそよぎ暮れてゆく松葉まつばぼた  
んのいろくの色

元結切る油ばさみで爪を切る夜は指先に赤く  
ふるへる

風が来て撒きならべたる花骨牌を吹き散らす  
よなわれらが戀よ

拗ねて拗ねて拗ねた揚句に泣きて泣きて寢入  
りし女のしだらなさかな

三味に混る大鼓の音のにくらしさ海は眞赤に  
夜のふけてゆく

白粉のにはひにひらきしとくと雨降る音の  
眠りを誘ふ

しとくと夏の夜ふけに降り出でしかへる心  
に降り出でし雨

二上りの流しの濡れてゆくころよさめくと胸  
の濡れてゆくころ

疲れたる夜が鏡に眠るとき遅きなじみを君が  
待つとき

ひけすぎし草履の音もしづまりし廊下にまよ  
ふ夜の色かな

明け方の夢は海へと逃げゆきし廊下にひとり  
よろめきて立つ

曙のひかりをみだし海の上に逃げまどふ夢の  
悲しかりけり

しらぐと海より来る曙のひかりに追はれ俤  
にありぬ

白紛のにはひのなかに夜の風に迎ふる秋の淋  
しかりけり

闇に赤く青く抜毛のふるふより悲しく細くこ  
ぼろぎのなく

灯かげうすき蚊帳にふるへて啼き出でしこは  
ろぎのあり夜は明け近し

こほろぎの青くふるへて啼く夜の蚊帳にそよ  
げる初秋の風

やはらかく蚊帳のにはひにつままれて眼ざめ  
し朝よ秋におどろく

さらくくさらくくと葦の葉を吹き來  
る風に輕う眼とづる

戀をする夢も明るき初秋の風のひかりにそよ  
ぐ葦の葉

朝  
蛇の殻遊廓の裏の紫陽花に青う光れる初秋の

初秋の夜の暗らみに明るにみ月にふるへてこ  
ほろぎのなく

ほんのりと夜が明けそめししづまりし廊下に  
光る初秋の風

初秋の風が光りて過ぎゆきし朝の廊下に死せ  
るこほろぎ

こゝろよく總身に痺れおぼえたる朝を冷たく  
海の光れる

白粉に汚れし君が襟足を淋しく秋が這うてゐる朝

初秋の朝のひかりの流れたる海に漂ふあまきかなしみ

秋近し海を凝視めてものいはぬ女の瞳の青うすみたる

潮風にうすく汚れし白粉のにはひのなかに秋の光れる

(一九二一、八)

夏も過ぎて秋になる頃から、私はふと——國へ歸つてから一度一年になる——といふやうなたよりない悲しさと——歌ももう一冊だけに溜つた——といふやうなほかない嬉しさとにそいられた。そして歌集を出したいといふことを前田君に相談した。前田君は快く賛成して、自分は東京に居ることだから萬事に心配してやらうといふことになつた。

併し歌を輯めかける頃から、私の生活は金と女のまぼろしに益々赤くいろどられて來た。そして歌集を出すのが何だかつまらぬやうに思はれて來た。輯めるのが苦痛で苦痛で

たまらなくなつて来た。そして一日遅れに遅れた。輯めてしまつてからは強ひて忘れてしまつてゐた。校正の原稿は来る度毎に焼いてしまつた。

十一月十四日の朝前田君と文光堂主人とから歌集の焼けたことを知らせて来た。私は悲しかった。併し焼けるのが因果のやうにも思はれた。私は妙に女に逢ひたくなつた。そして直に船に乗つた。海の上に夜が来て寒かつた。夜遅く東京へ這入つた。女に逢つてもやはりなぐさまなかつた。私は何だか死にたいやうな氣もした。

原稿の中「南の海岸より」「夢見る花」「夏の呼吸」は再校したのが残つてゐるが「葦の葉の戦ぎ」は跡なく焼けてしまつたこ

とが解つた。そしてそれは私が夏の終りに洲崎の女のもとで讀んだ歌であつて、まだどこへも發表しなかつたのである。私は喪神した者のやうにがっかりしてしまつた。そして歌は一切思ひ絶たうとした。前田君はいろいろなぐさめて呉れた結果「凡ての呼吸」が出ないのに、また此度のも出ないと困るからといふので、兎に角焼けた不足分を「凡ての呼吸」から補ふことにして、「私が原稿だけ揃へる、其他校正から何から一切前田君にやつて頂くことにした。

私の生活はすべて秘密で造られてゐる。そして恐らく日本で一番詩人らしい生活を送つてゐると思ふ。私の焼かれた歌の女は私が詩人であるといふことは知らない。兎に角



前田君が比較的一番よく知つてゐる。それで今度の歌集に就ては前田君に書いて頂くことにして、私はなんにもいはないつもりであつたが、これだけ書いて置くことにした。

歌に就ては何にもいひたくない。

終りに前田君のお陰で、精神的にまた物質的に私がこの歌集を出すことが出来たことを記して深く謝します。

十二月四日夜

著者

私の二十二歳もまのあたり過ぎやうとしてゐます。私は遠からず上京して活動すべくこの頃は夜もろくに眠られませんが。私はどのみち實業界に立つて働くつもりです。併し文藝界の爲には飽く迄貢獻したいと思つてゐます。

### 夕暮様

「葦の葉の戦ぎ」が発見せられましたか？「凡ての呼吸」を捨て、もとのまゝにそれを入れといて下さい。そして「凡ての呼吸」は別に全部まとめて來春出すことにしませう。

何だか夢のやうだ。併し僕は「葦の葉の戦ぎ」がどつかに残つてゐるやうな氣がして、それがこの頃しきりに女に逢ひたくつてしやうがなかつた。でも今日はまた一層のこと焼かれちやつた方がよかつたやうな氣もする。

もう三分の二程校正がすんだつて。ほんとに君の御盡力を感謝する。この頃はたゞ忙しくつてしみじみ手紙も書けない。近い内に上京してゆつくり話ませう。年末でお忙しいことだらう。僕も忙しくつて困つちまふ。金と時とに追はれて。

十二月八日

近藤元

明治四十五年一月十日印刷  
 明治四十五年一月十三日發行

。南方の花奥付

著者 近藤元治郎

發行者 野口安治

印刷者 日下主計

印刷所 日英舎

不許複製

(定價金六拾錢)

發兌元

文光堂

大賣捌

東京市神田區旅籠町一丁目二十三番地  
 (振替口座東京一九五五番)  
 ○東京堂 ○東海堂 ○北隆館 ○至誠堂  
 ○上田屋 ○益文堂 ○前川 (外全國各地書店)

